

〈パネルディスカッション〉

【沖藤】

それでは、先ほど来お話しいただいておりました3人のパネリストのかたがたに、時間があまりないので申し訳ないのですが、お一人5分時間厳守で、最後のまとめのお話、あるいは追加のお話、気付いたこと等々をお話いただければと思います。時田さんからよろしく願います。

【時田】

少し補足をさせていただきます。今、いわゆる要介護度の、重度の方の最後の看取りとして期待をされていますのは特養ホームであります。現在、当法人の特養ホームの要介護度は平均4ということですが、4、5がほとんどという状況です。ここで特にお話をしたいのは、終末期のケアです。先ほども清家先生から医療のお話がありました。現実には特養ホームで体験をしておりますが、ほとんどの方が実は医療処置の必要がないのです。無いというよりはむしろ控えるべきだと思います。というのは、高齢になって死を迎えるのは自然の摂理だからです。特養ホームはある意味で医療の処置を終わった人たちです。現実には、厚労省のデータでも100歳以上の方の1年間の医療費が平均119万円かかっています。国民医療費は一人当たり33万円ですから、このような医療費の使い方は間違っていると私は思っております。特養ホームの入所者の平均年齢は、現在87歳で90歳以上が半数を超えています。急性期の症状はほとんど無いので、医師が関わる必要がないのです。必要なのは、介護と看護なのです、どうもその辺の認識を早期に意識転換しなければ駄目だと私は思っています。必要のないところにお金をつぎ込んでるんです、今の仕組みは。最後のところにお金が大量につぎ込まれている。これは見直しが必要な非常に大きな課題だと思います。



われわれ特養ホームの終末期のケアでは、最後まで経口摂取に努め、実に平安な臨終を皆さま迎えていらっしゃいます。医師のみなさんが「俺もここで死にたいよ」といわれる状況です。とにかく床擦れなど一切作りませんし、脱水を起こさせません。はっきり言えば、一般病院の介護力は、特養の半分しかないというのが現実でしょう。どうも日本の医療介護政策は、根本的な間違いを犯しているのではないかと思います。われわれの現場感覚では、既に社会保障政策は大転換の時を迎え、特に現在、医療につぎ込まれている費用をむしろ介護へ廻すべきだと率直に申し上げたいのでございます。ありがとうございます。

【富安】

只今の時田さんのお話、共感というか全く同感です。自然な死に方をするにはどうしたらいいかという、いろいろな研究がありますけれども、生きている間に精いっぱいエネルギーを使い切って、そしてくたびれ果てて、死んでちょっと休みたいというふうになるまで、そのエネルギーを使えるかどうかですけれども、使える仕組みをどう作るかということが、多分、まだ実験途上なんだと思いますが、そうありたいと思っています。

最初の発題で「今後の課題」という4番目の所を残しておきましたので。生きていく基盤としての住まい、単なるハウスの問題ではなくて

関わり合い方も含めた住まい方、私はその一つの理想形、若い人たちがかなり早くからやってきたシェアハウジングの形を、高齢者だけとか若い人だけではなくて、高齢者もいたり子育て中の人もいたり、さまざまな、ときにはよその国からやってきた留学生もいたりという、混ぜこぜの、ごちゃ混ぜの住まい方ができていかないかなど長年考えてきましたが、しなきゃならないことが他にもいっぱいあるものですから、これまで手付かずできました。

シェアハウスについては銀行の不祥事なんかもあったりして、まだ、さまざまな状況、さまざまな環境の人たちが一緒に暮らしていく暮らし方については、きちんとした経験も積み上げられていませんし、そういうことの調査もまだ見えていません。でも最

終的には、もともとは血縁の関係の中でのそうした住まい方が他人同士の間でもできるはずだと思ってこれまでの会の活動もいろいろやってきたつもりなんですけれども、最後は人間としての、人間同士としての連帯とか、人を大切に思うとか、今、困ってる人がいたらほっとけないとか、自分は大したことはできないけれど、これぐらいのことならできるみたいな、ちょっとした小さいものを組み合わせ、と言いましょか、結び合わせてそれなりの一つのまとまったものにしていくという、これは息の長さも要りますしお金も必要です。いつも悔し紛れに「悪いことしてないからお金がないのよ」って負け惜しみを言うんですが、すみません、悪いことしないでお金持ってる方には大変失礼な言い方ですけれども、常に資金をどうするかが課題です。

北九州市は政令市の中で一番高齢化率が高い。それなのに「子育て日本一」と言われたりしますし「住みやすいまち日本一」というふうな所にとときどき顔を出したりします。それから、私どもも関わっている北九州市立大学との協働、いわゆるネットワークという関係の中では、「大学の地域貢献度」と言う点で日本で1、2の評価を得たりしてきましたので、長年こつこつとやってきたことが、今、少しずつそういう形で結果を出しつつあるのかなと感じています。ただ、どこまで続けられるかが問題です。こういうことを面白半分、つまり、そこから収入を得るわけでもなくやろうとする人ってそんなに多くない。やっぱり社会にゆとりがなくなっているということを実感しています。

私たちが活動を始めた頃は、ボランティアでこういうことをやろうっていうときに、この指止まれ方式で、かなりの人たちがそれに共鳴して集まってきましたけれども、今はちょっとそういう余裕がなくて、しかもボランティア活動の必要性ってあちこちで災害があるたびに人が動きますし、こつこつとあまり目立たない所で日常的にエネルギーと時間を使っていく活動に積極的にかかわろうとする方は少なくなっています。

私たちが会を始めたときは、まだ自分たちが十分に若かったので、年を重ねた方たちを支えたい、そういう気持ちで始まりました。世代間の連帯と言いますけれども、それだけではなくて、たとえば私の立場で言うと、親は伊豆にいますし私自身は九州に暮らしているわけですから、そんなにしょっちゅう駆けつけるわけにもいかないので、自分は自分の住んでいる地域の親世代のために頑張るし



私の親のいる所ではその地域の皆さんがそれなりのことをしてくだされば、それが最も理想的な形ではないかと思ってやってきました。しかし、今はもう、れっきとした当事者集団になっているわけですから、亡くなる会員も多く、最大時1300人くらいだった会員数も今年正確に数えたら500人を切るぐらいになっています。それでもそれだけの人たちが毎年3000円の会費を払って会員として活動しようと思ってくださっていますし、それから活動者の平均年齢が大体もう70歳を超えています。もちろん、会員でいるだけで学習会はともかく、配食などの活動には参加できない方もいます。それはそれでいいと思うので、世代を超えたいろんな立場の人がいろんな関係性をつくっていく、そういう実験体としての営みをこれからも大事にしていきたいと思っています。

そこをつないでいく張本人というのは高齢当事者である私たちがやらないで誰がやるのよ、そこは自分たちでやって見せていこうとときどきは世の中を慨嘆したり後ろ向きになったりしますが、そういうときにはまた学習をして新たに意欲をかき立てながら前進していこうと思っています。

【青森】

きょうは、伊豆から、うちの大得意さまが来て聞いていただいています。本当に遠い所ありがとうございました。静岡県 の 県知事さん川勝知事が、食と健康は自分でもやれる、だが社会奉仕というかそういうことは自分ではできないので、社会貢献は誰かが声掛けてあげないとできないということで、私たちはそれをこれからもやっていきたいなと思っています。元気な高齢者を見ると「あなた、何かできない?」、「お菓子作り、どう?」、「おまんじゅう作り、どう?」みたいに声掛けを、今、一生懸命やっております。

一昨年、樋口先生にお会いしたときに、樋口先生からすてきな言葉をいただきまして、これ、とても皆さんにもいいと思うので読ませていただきます。



歩いて買い物、近くに仲間、ちょっと稼げる仕事があって、できることなら人助け。共に集いて、共にはぐう、こんな地域に私はおりたい。という言葉をいただいて、これ、私たちはこれを標本にしてみんなで頑張っております。今、介護してる方に本当申し訳ないんですけど、私の所では働くデイサービスって言われるぐらい、みんな元気で仕事を、毎日、朝8時にはみんな集まって4時まで頑張っております。これからも1人ずつ増やして元気な高齢者を増やしていきたいと思ひます。

【沖藤】

どうもありがとうございました。3人の先生がた、膨大な人生、膨大なチャレンジの歴史を、わずかな時間の間にまとめてお話くださいまして本当にありがとうございました。会場の皆さまがた、いかがでしたでしょうか。多くの方が感銘を受けられたのではないのでしょうか。盛大な拍手で3人にお礼を申し上げたいと思ひます。

それでは引き続きグループ討議に入ります。10人ぐらいで1グループをつくっていただいて、どなたか1人が司会役になっていただいて、これから14時10分ぐらいまでの30分間をそのグループ討議の中で、質問したいこともあったでしょうし、いろいろ感想を述べたいこともあったでしょうし、そういうようなことをお話しいたいて、司会者の方から後に発表していただくという形に入りたいと思ひます。皆さま、いすを動かして対面形式になるようにグループをつくっていただければ幸いです。どうぞよろしくお願ひいたします。

〈グループ討議〉

(グループ1)

まとめたわけではないのですが、皆さんのところから出てきた言葉を少しご紹介したいと思います。いろんな活動を高齢になつてからなさっている方のたくさんいらっしゃるグループで、私自身も非常に刺激を受けた内容でした。その中で皆さんにお伝えしたいと思ったのは、まず、今、女性がすごく元気だけど男性が元気がないのではないかとということで、「男性を元気づけるような活動というのをしたい」というのを言ってらした方がおられます。

それから、「今、非常にボランティアとか志のある方で支えられているという活動があまりにも多く、そこは政策できちっと支えることも考えていく必要はある」という感想を言われていらっしゃいました。

それから、「日本の未来を見据えた活動というのは非常に大事」ということと、「新しい日本をつくるために1回、壊してでもいいから政策を」というようなことも元気のあるお言葉として出た次第です。

それから、高齢者住宅の管理会社などをなさっていると、今、高齢化が進んでいる団地などが問題になるんですけど、「それを活気付けるために、まず、事業者がやるべきか、行政なのか、住民なのか、その辺も大きな課題」という話をされています。

あと、がんになられた方が傾聴ボランティアをされているんですけど、「そこで、いろんな問題がある」と。「介護、認知、虐待というところで表には出にくい、いろんな問題を抱えながら生活している人がたくさんいるんだ」というようなことを言われておりました。

本当に、まとまったことではないんですけど、皆さんから出てきた言葉がこんなことでございました。以上です。

(グループ2)

私たちのグループはちょうど10人で男性と女性が半々ずつ、とてもバランスの取れた、いい議論がどうか事例を随分紹介し合いました。そして、皆さんそれぞれ地元のほうで老人会なり、町会なり、ボランティア活動していらっしゃるんですけども、市原で活動していらっしゃる方は奥さまが早く亡くなられて、その家を開放して地元で皆さんの集まる場所になっているとか、それから配食サービスをしていらっしゃる方、傾聴ボランティアをしていらっしゃる方、社会福祉教育に力を入れていらっしゃる方、それから、1人、姫路のほうからいらした行政マンがいらしたんですけども、その方も、後からお話しますけれども皆さんの意見を聞いて深くなずくところもあるというような感じでした。それから、自立支援ネットワークというものを自分で立ち上げて高齢者のために活動を支援している、例えばパソコンによって、そういう活動の幅を広げるような活動を行政と組んでやっていらっしゃるということもお話を伺いました。

そして共通して感じることは、ボランティアは今、非常に、みんな一生懸命やっているけれども高齢化していると。後継者がなかなか育ってこない。付いてこないということ。それから行政とどのように連携していく、共同していったらいいかというようなことも大きな課題として挙がりました。

それから、さきほどのボランティアでは女性の方は特に配食サービスに力を入れていらっしゃる、そういう方もいらっしゃいました。女性は主に家事援助の力を活用して、そういう地域の中で力を発揮したらいいのではないかと、男性はそういう送迎サービスをしたらいいいのではないかとというような、そういう課題も出てきたんですけども、最終的に話し合ったのは、男性の社会参加をどうするかということなんです。それで、なかなかいい考えは浮かばないんですけど、お一人の方が「行政を動かすには、そういう男性参加も含めて、文書によって議会なり行政なりに要請を出す」と、「そして、それをフォローしていく、しつこく追求していくと、そういうことで行政も動くのではないかと」というような一つヒントをいただきました。

まとめませんが、以上です。

(グループ3)

うちは9名のうち8名が社会活動を盛んにしている、成年後見人、ライフデザインプランナー、知的障害者の補助、『植木鉢の会』など、それから民生委員を10年やっていたとか、ユネスコ活動、いろいろあります。

その中でみんなで課題を出し合いました。二つ出ました。まとめました。一つは資金不足、高齢化をしている内向きに活動がなくなってきているというのが大きな課題。もう一つは、高齢者特有のフレイルが問題になりました。

一つ目の課題について、みんながああでもないこうでもない提案を出しました。「行政の助成金をもらうのも一つじゃないか」、「だけでも、それだけでは足りない」と、「もっと根本的に考え方を変えていく、いわゆる私たち高齢者が自己満足に活動するのではなくて、次の代につなげていく、社会を変えてく気概を、誰もが生きがいを持ち活躍する地域へ私たち自身が変えていく」と。ただし、今言った資金が足りないというところでは、いわゆる国も政策として、もっと補助をする、民活の政策を深めていく。ぜひ、内閣府さんもっと広い視点からそういう国をつくり上げていくための高齢者の動きっていうふうな捉え方をさせていただきますと、そういう民活に対しても意識を変えていただけるのではないかなと思います。

そうして、「内向きになってる」という話も出ましたが、いろんな活動してるのをよく調べてみると、今、SDGsを国連で決めて、各国、我が国も政府を挙げて2030年までのいろんな課題を整理し直してるところがあります。振り返ってみれば、私たちの社会活動は全部どこかに引っ掛かっている、そして底辺で必ずお互いに問題提起が繋がってるっていうところがありますので、そういうSDGsの組み直しによって、もう一回、私たちの活動を見直す、国も見直していただくというふうな双方の努力が必要ではないかという事です。

それから、もう一つ出された課題は、「高齢化してる私たちの年齢の体力もいろいろ厳しくなってきた、フレイル状態になっている」という指摘がありました。確かにそれは現実問題として、内向き、1人暮らし、孤独死が増えるとか、いろいろな現実の厳しさが高齢者であるがゆえに出てきているというのは皆さん活動中に感じていらっしゃる。そこをどうするかということなんですけれども、健康寿命と平均寿命の差を縮めるためにも、私たちの努力ももちろんですけれども国の施策としての生きがいへの創出に対する援助もぜひしていただければと思います。

補助はありますか。結局、今、活動しているメンバーはどうしても年金生活っていう方が、パーセントが多いので、もう少しその部分の、豊かな心になれるように、豊かな財力も付けていく。受けているサービスを受けている人たち側も、提出する側も、それからサービスを受ける側も、お互いに貧乏ばあさん同士でやっているとなかなか前向きに広がらないというところ、国の根幹として、人数はこれだけ高齢者が増えているということは、国としても見直していただくことをぜひ提案したいと思います。以上です。

(グループ4)

小田原から参りました『社会福祉法人小田原福祉会』のアズマと申します。こちらのグループは『小田原福祉会』のメンバーと『高齢社会をよくする女性の会』の最高幹部の方がいらして、非常に濃密なよやま話が繰り広げられました。明年、小田原で『高齢社会をよくする女性の会』の全国大会が行われることになっておりまして、詳しいことはまだ決まっていなんですけれども、これからしっかりと詰めていきたいと思えます。

小田原のほうでは、私どもの法人でようやく外国人の介護をしてくれる人材を受け入れるっていうのが去年の11月からスタートいたしまして、インドネシアから6名の男女が来てくれました。本当に、実際の施設のご利用者ですけれども、しっかりと受け入れてくれ、その外国の方をこちらが心配する以上に受け入れてくれたりとか、そういうのが、今は施設の中でしかないですけれども、いずれ在宅のほうにもそういうふうな形で外国のかたがたがわれわれの介護のお手伝いをしてくれる時代になっていくのではないかなというところがありまして、樋口先生のほうから、「そのときに、ありがとうという言葉、その方の国の言葉で言えるようにしなくちゃいけない

な」などのお話もありまして、さすがだなというふうに思いました。

そのような形で、本当に、そういう社会貢献をしているメンバーが今はなかなか若手のほうにシフトしていかないという状況もありますけれども、明年に向けての『高齢社会をよくする』全国大会の取り組みの中で、どういふに次の世代のメンバーに、いかに継続していけるのかなというところを考えながら取り組んでまいりたいと思いますのでよろしくお願ひします。以上でございます。

(グループ5)

私、横浜市の市役所のほうから来ましたイケダと申します。私のグループは自己紹介のほうで終わってしまった感があるんですけども、男性の方も何名か私も含め、いらっしゃいまして、今、地域のほうで囲碁を通して、また、世代交流であったりとか、孤独の対策っていうのをされていたりですか、あとは最近、定年退職をされたという方で中央区から来られているというところなんです、区のほうで無料で『区民カレッジ』、退職後の生活というところでどういふな生き方をしていくとか、退職後の生き方教室とかというのを無料で参加できるという所がありまして、男性の社会参加であったり、男性に限らずですけども定年した後でどういふに社会参加につなげていくかというところが大きな課題で、教室に参加されている中でもかなり元気な方がたくさんいらっしゃるというところで健康寿命を延ばしていくというところで社会参加も重要なところの一つではないかというような意見が出ていました。

あと、青森さんのお客さまで伊豆からいらしていただいた方もいらっしゃいますが、その所は、だいぶ村自体が過疎化が進んでいるという所でしたけれども、村にいる高齢者の方もみんな働く所があるというか、畑仕事をされていたりですか、散歩をされたりグラウンドゴルフをされたりというところで、常に日々何かすることがあるというところで社会参加につながっているというところが大きな発見というか気づきを得られました。

やはり認知症の方もいらっしゃらないというところで、人とつながるとか、社会参加をするとか、働いているというところも一つ大きなポイントなのかなというふうに私は感じたところです。以上になります。

(グループ6)

私の所は自己紹介は全くしませんで、それぞれ、きょうの3人の方のお話を伺った中でどんな感想を持ちましたかということでお話をさせていただきました。中に、学生さんに教える立場の方が2人いらっしゃいまして、「今日のこういうフォーラムは、若い人たちにぜひ参加してほしい」というお願ひが何人かありました。

実は私も男女共同参画という活動を通して、これも絶対に当たり前の社会なので若い方たちにぜひいろいろな事業に参加してほしいという気持ちがあるのですが、なかなか若い人たちの参加がありません。「これはどういふことなのか」ということもお話をさせていただいたのですが、そんなわけで、「なかなかこういう機会に、ぜひ若い人たちに参加をしていただきたいけれども、それがなかなかできませんね」というお話を終わりました。

それから、皆さん、「健康寿命を延ばしましょう」というお話がだいぶ出てまいりました中で、きょうの清家先生のお話を通して、先ほど青森さんのお話のように皆さんが出資をして、少しだけ稼いで、それが生きがいになったら、そして「それが社会貢献になったらもつといいよね」、「こんな活動、これからも私たちは続けていきたいよね」といふようなお話になりました。

それぞれ、皆さんが熱く、きょうの3人の方の感想を申し上げましたけれども、私は記録を取っておりませんで、司会をさせていただきましたので、この辺で恐縮ですが終わらせていただきます。

【沖藤】

どうもありがとうございました。これで6グループ全部、発表が終わりましたが、追加でしゃべりたいというようなそういうグループの方いらっしゃいますか。はい、1人います。どうぞ。短めにお願ひしますね。

【参加者】

このグループでは個別に話したので、まとめるという形ではないんですけど、私が触れたことでちょっと言い足りないことがありますので申し上げます。地域包括ケアという制度が、今いろいろ論議されていますけれども、私、今、提案してるのは、家庭の中でダブルケアという形で子育てと親の介護、それを両方抱えて苦労されている家族がいっぱい、そういう所で囲碁を普及したらどうかと。

新聞でご存じのように、10歳の女の子が今年4月にプロになるという。3歳の頃からやろうと思えばできるんですが、それからもう一つ、101歳のおばあさんが100歳のお祝いのおきにプロの棋士と碁を打っている記事が、実はここにも持っているんですが、あるんです。

その方が碁を始めたのが93歳で、7年間で初段になったと。碁は言葉が通じなくても世界中の人がやるということで、皆さんそういう意味で、これから福祉の問題あるいは教育の問題に関わっているときにちょっと頭の中にかすめていただけたらよろしいかと思います。

もう一つ、最近出た本の中で、『囲碁文化と学校教育』という本に出ています。囲碁は娯楽以上に教養である。囲碁を学校教育に取り入れようと長年尽力してきた著者が囲碁文化の発祥から考察し、その教育的側面とアジア友好の可能性を追求した、そういう一言があります。

それからもう一つ。これは20年前に出た本ですが、『囲碁はボケ予防の妙手』。囲碁を打ってボケを防ごう、治そう、『二万一千人以上の痴呆患者を治療し、ボケ治療で世界の最先端をいく金子先生の“ハツラツ人生のススメ”』。こういうこともございますので、これからちょっと新聞を見るなりテレビを見るなりしながら囲碁に関心を持っていただければありがたいと思います。

これは、私、個人的に趣味の問題で言っているのではなく、教育とか福祉の中で論議されてることなのでちょっと紹介したまでです。よろしくお願いします。

【沖藤】

ありがとうございました。脳トレのお薦めでした。

それではこれで終了させていただきます。15分の休憩の後に、この会場で全体会がございます。また皆さまどうぞお集りくださいますようお願いいたします。